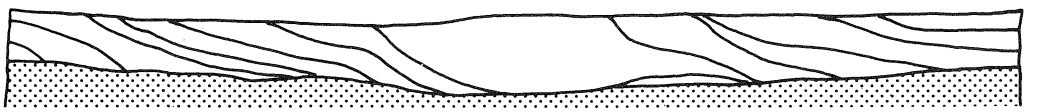
埋蔵文化財 愛知

No. 17



同心円を描く製塩土器堆積層（写真）とその断面

松崎遺跡の製塩遺構

松崎遺跡は、知多半島基部の伊勢湾岸に形成された砂堆上に立地する古代製塩関連遺跡である。今回の調査では、奈良時代を中心とした数十次の製塩操業を示す灰・炭化物・土器堆積層を検出し、数万個体分の破砕した製塩土器が出土した。また、ハマグリを主体とする貝塚が点在し、貝に混じり須恵器、土師器、鉄製釣針・鏃、土錐、紡錐車など、持に古墳時代後期の生活を伺い知る数多くの好資料を得た。

（6ページに関連記事掲載）

平成元年度事業計画

(財)愛知県埋蔵文化財センター

・埋蔵文化財発掘調査及び報告書の刊行

○名古屋環状２号線関係　約27,590㎡
　1．松河戸遺跡　2．勝川遺跡
　3．池下古墳　4．朝日遺跡
○東海北陸自動車道関係　約 4,750㎡
　5．毛受遺跡　6．田所遺跡
○足助バイパス関係　約 500㎡
　7．成瀬古墓
○国道23号線バイパス関係　約 7,000㎡
　8．岡島遺跡
○水野特定土地区画整理関係　約 2,000㎡
　9．小田妻古窯
○県道東三河環状線関係　約 2,100㎡
　10．麻生田大橋遺跡　11．森岡古墳
○県道新川清洲線関係　約 200㎡
　12．清洲城下町遺跡
○県道萩原多気線関係　約 5,240㎡
　13．岩倉城遺跡
○県道蒲郡碧南線　約 5,000㎡
　14．東光寺遺跡
○中畑橋橋梁整備　約 3,100㎡
　15．清水貝塚
○五条川改修関係　約 4,800㎡
　12．清洲城下町遺跡
○水質障害対策関係　約 1,300㎡
　16．土田遺跡
○報告書の刊行
　阿弥陀寺遺跡（名古屋環状2号線関係）
　廻間遺跡（名古屋環状2号線関係）
　月縄手・小田井遺跡（名古屋環状２号線関係）
　志貴野遺跡（国道23号線バイパス関係）
　岡島遺跡（県道蒲郡碧南線関係）

・発掘調査技術等研修会の開催

　基礎研修会　２日間　募集人員　30名
　専門研修会　２日間　募集人員　40名

・広報紙誌の発行

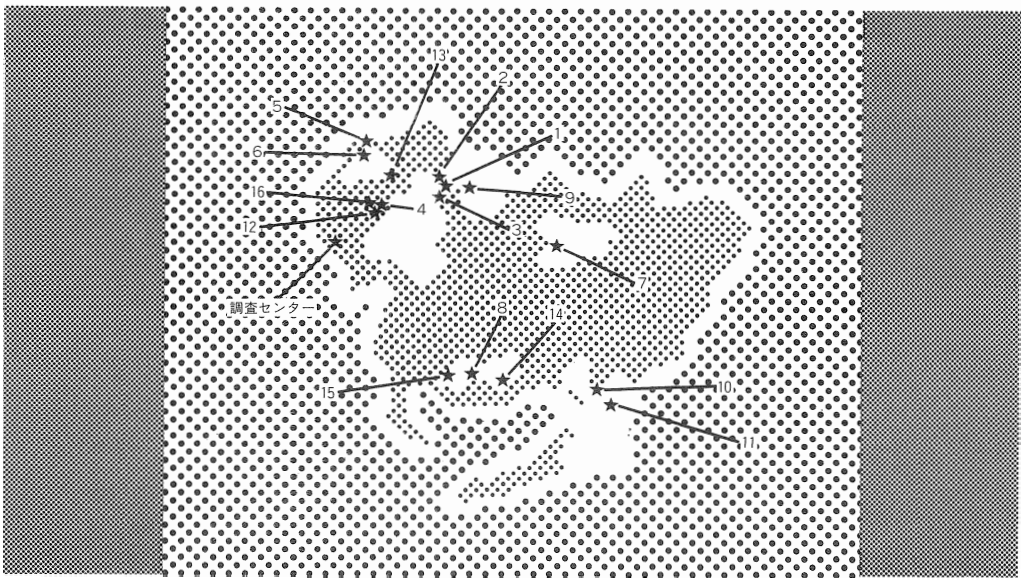
　「愛知県埋蔵文化財情報」の発行　年１回
　「埋蔵文化財愛知」の発行　年４回

・埋蔵文化財展の開催

　第１会場　安城市文化センター
　　7月28日～8月6日
　第２会場　愛知県埋蔵文化財調査センター
　　8月14日～8月31日
　（８月20日(日)・26(土)は休館）

・埋蔵文化財講演会の開催

　第１会場　安城市文化センター
　第２会場　弥富町総合社会教育センター



愛知県教育委員会実施の調査事業

愛知県教育委員会文化財課

県教育委員会は、遺跡の周知徹底をはかり、様々な開発事業との調整・協議のための基礎的資料の作成を、市町村教育委員会の協力をえてすすめてきたが、本年度も次に掲げる調査を実施していく。

(1)中世城館跡調査事業
—尾張地区—

文化財課では、昭和54年度に市町村教育委員会の協力のもとに県下の城郭遺跡の現況概要を調査し、823カ所（尾張地区 272カ所）の城館跡を確認している。それらは、山間部・丘陵部・平地部に立地し、多様な形態を示している。しかし、近年の山林の著しい荒廃や各種開発事業の進行に伴って、城館跡の現状が変容し、さらには滅失するおそれが増大しつつある。このため、城館跡の現状等を正確に把握し、その保存に努めるとともに、開発事業との調整・協議に備えるため分布調査を実施するものである。

また、県下の城館跡の多様な形態は、中世から近世初期にかけての尾張・三河の政治的あるいは軍事的情勢を反映しているものと考えられ、この視点での研究資料の蓄積を目的としている。

調査方法は、関係市町村教育委員会の協力のもとに漸次計画的に現地踏査を実施し，城館跡の現状確認、聞取り調査及び縄張図の作成を行う。同時に、関連する文献・地誌・絵図・地籍図を検索し、必要に応じてそれらの撮影・複写を行い、調査カードを昨年度にひきつづき作成する。

本年度及び次年度は、尾張地区（18市・27町・5村）を対象として調査を実施する予定である。

(2)遺跡分布地図作成事業
—東三河地区—

遺跡分布の周知徹底は、埋蔵文化財保護の基本であり、文化財保護法第57条の4では国及び地方公共団体の義務とされている。遺跡分布地図は開発事業と埋蔵文化財保護との調整・協議をすすめるうえで、最も有効な資料となるものである。

県教育委員会では昭和59年度より遺跡分布地図改訂版の作成をすすめており、すでに「愛知県遺跡分布地図(1)～尾張地区」「同(2)～知多・西三河地区」を刊行してきた。今年度は東三河地区遺跡分布地図作成を行う。

この調査では、当該市町村教育委員会と協力しながら、遺跡の現況・所在地・出土遺物の状況・保管場所等を把握し、遺跡台帳と分布図を作成する。また、各市町村所在の国・県・市町村指定の史跡・名勝・天然記念物も登載し、土地に密着した文化財の保護に努める。

(3)清洲城跡調査

西春日井郡清洲町にある清洲城と城下町跡は、17世紀後半代における尾張の支配体制や、近世城下町の形成、都市構造等を知るうえで、極めて重要な位置にあると評価されている。

近年、土木工事に伴う発掘調査が行われて遺構の一部や遺物が明らかにされ、清洲城跡を総合的に調査する必要性が高まってきた。このため、研究者・行政関係者による調査委員会を構成し、今後の調査方法の検討、関連資料の収集をすすめる。

(4)第2回埋蔵文化財調査研究会の開催

昭和63年度に実施された発掘調査のうちの主要な10例の内容報告を中心に情報交換を行う。

開催日　平成元年7月7日(金)

会　場　愛知県埋蔵文化財調査センター

シリーズ 「条里制」を探る

尾張平野の条里地割

濃尾平野は、木曽川・長良川・揖斐川のいわゆる木曽三川によってつくられた東西約40㎞、南北約50㎞の広大な沖積平野である。

現在、平野の各所で耕地整理・区画整理等々がすすみ、耕地の往時の地割は大きく改変されつつあるが、それでもなお所々に「条里制」によると考えられる条里地割がみられる。これに旧地籍図等の検討により復元されるところを加味すれば、その分布規模において全国でも有数の平野といえる。

現在、本センターでは、この条里地割の発掘調査を春日井市松河戸町周辺で実施しており、濃尾平野、なかんずく尾張平野における条里地割に関する知見が得られつつある。そこで今回のシリーズでは、かかる知見を紹介しつつ、謎が多いとされる「条里制」について少し考えてみたい。

条里制について

条里制とは、土地を六町（約633m）間隔で縦横に分かち、六町間隔の列を条、六町四方の一区画を里とよび、さらに一町間隔で里を区切って都合36の区画をつくりその一区画を坪とよび、“○国○郡○条○里○坪”と呼称することによって地点を示すという地番制度であり、かつまたこれに基づいた地割を全国に施すことにより、全国の耕地を統一規格の地割の下におこうとする壮大な地割制度である。

このような条里制がいつごろ成立し、全国的に施行されたかという点については、いまだ定説がない。文献史料によれば奈良時代に存していたことは確実であり、その施行を奈良時代とみる研究者が多い。

一方、全国各地で現在すすめられている条里地割の発掘調査の所見では、出土遺物の少ない水田遺構の年代決定――埋没年代はともかくとして、開発年代・地割の成立年代――の特定のむずかしさも手伝ってか、いまだ奈良時代にさかのぼり得る確例をみないというのが実状である。そしてその多くの事例は、少なくとも平安時代・鎌倉時代にさかのぼるとするもので、「中世条里」なる造語（？）も生まれている。こうした場合、土地に地番付された年代とそれに基づいて地割が施行された年代とが時期を異にしていたとみる立場も成り立ち、問題は複雑である。

尾張平野の条里地割

上述の濃尾平野のうち、木曽川左岸は、尾張平野とも称される。尾張平野の条里地割は、金田章裕氏の調査によれば、犬山市街東部の小規模な氾濫平野・犬山扇状地の東側扇側部、三宅川、五条川、庄内川などの河川流域の後背湿地部などに卓越した分布をみる（図版）。これらは、現地表面に残る地割、古い地籍図等に示される地割を手掛りとしたもので、このほかに氏も指摘されているように河川の洪水等により埋没したものが多々存するであろうことは想像に難くない。また地割の連続性等から、これらすべての条里地割が同一時期の所産とみなすことはできないようであるが、具体的にいつごろ形成されたものかという点については、全く想像の域を出ない。ちなみに文献史料によれば、中島郡、丹羽郡で奈良時代に条里制が施行されていた確証がある。

勝川・町田・松河戸遺跡の調査

こうした意味で、本センターが実施した（一部継続中）春日井市の勝川遺跡、町田遺跡、松河戸遺跡の発掘調査は、現地表面に条里地割が明瞭に認められるとこであり、これらの地割がいつまでさかのぼり得るのか、あるいは坪内の土地利用状況の変遷を知る上で注目された。これら３遺跡は条里地割からすれば一連のもので、当該地は、研究者により若干の見解の相違はみられるものの山城国醍醐寺領の「安食（あじき）庄」の故地に比定されるところである。安食庄は、延喜

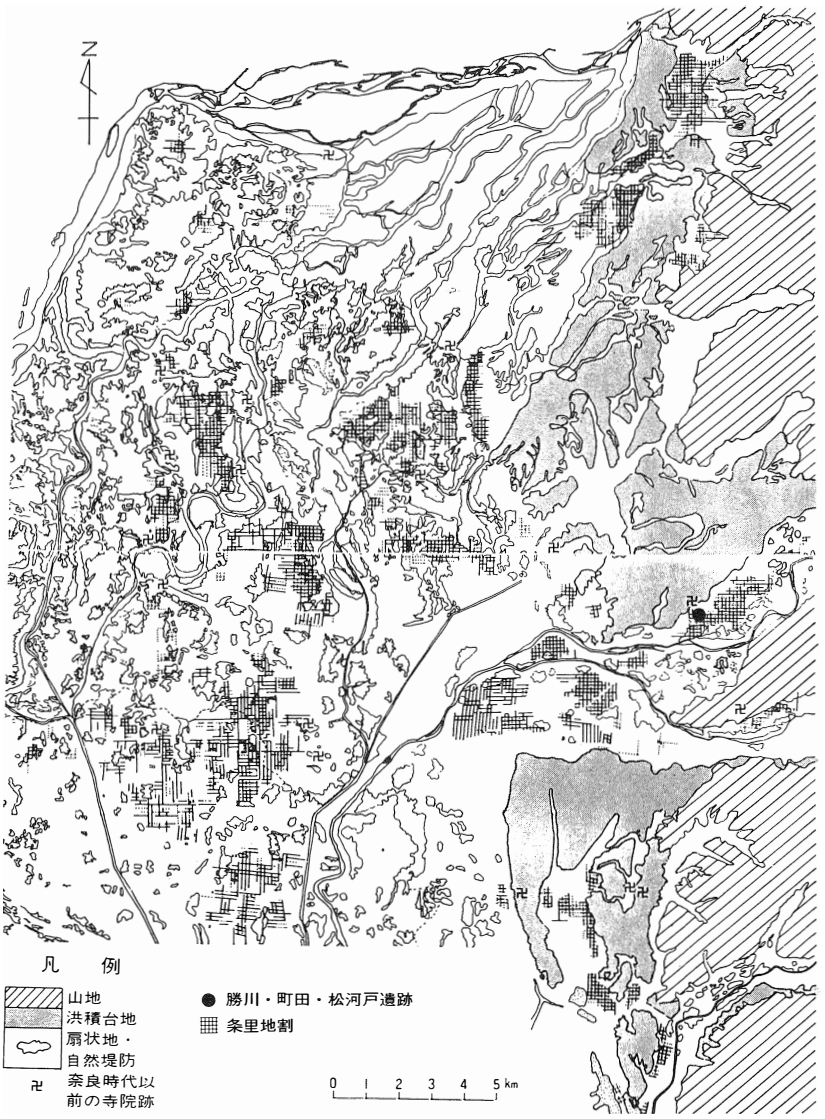
14年（914）に統世王によって同寺修理料として施入されたことが知られており（康治２年　官宣旨案）、その具体的様相については、幸いにも康治２年（1143）の尾張国安食庄検注帳案によりその庄域、当時の土地利用状況が知られる。こうした文献史料にみる記述と発掘調査での知見が果たして一致するものなのか否か、こうした点も注目されるところであった。

次回より派生する問題もふくめつつ調査所見を紹介することとしたい。

（北村　和宏）

参考文献

青木和夫　『日本の歴史３』中央公論社　1973年
金田章裕他　『愛知県開拓史－通史編』愛知県　1980年



尾張平野部の条里・条里型地割分布と微地形

（金田章裕 1980「第１章第３節古代(2)」『愛知県開拓史－通史編』愛知県による）

遺跡紹介

松崎遺跡の古代製塩について

東　海　市

1．はじめに

東海地方を代表する製塩遺跡として知られる東海市松崎遺跡の製塩土器表面より検出された珪藻遺骸を分析し、古代の製塩法について知見を得ることができたので報告する。

珪藻は10～100μmの植物プランクトンで、pHや塩分濃度、水流によって住み分けており、その生態性についても種によってそれぞれ微妙な差異がみられる。

2．海藻付着生珪藻

昭和63年度の松崎遺跡の発掘調査によって、海水を濃縮するために使用されたと推定される製塩土器がおびただしいほど出土した。

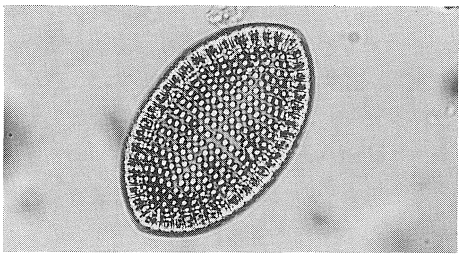
製塩土器は、筒状ないし円錐状の脚部と深鉢状の杯部からなる。杯部は海水煮沸にあたって、被熱され、さらに器壁や土器内部にも塩分の結晶を生じるので土器そのものにひび割れや剥離が起きやすく、その破損度はきわめて高い。そのため、製塩が行われた遺跡では、時代を問わず多量の製塩土器片の廃棄と堆積がみられる。

筆者は、松崎遺跡中の古墳及び奈良の各時代における製塩土器片を採取し、水洗と酸処理・遠心分離ののち、廃棄土器表面から抽出された珪藻遺骸の顕微鏡観察を実施した。

〈珪藻遺骸分析結果〉8～9世紀

種　　名	個体数
Amphora sp.	2
Cocconeis dirupta	2
Cocconeis sp.-1	1
Cocconeis sp.-2	2
Cocconeis scutellum	183
Rhopalodia gibberula	9
Synedra sp.	1
	計 200

出現珪藻は、いずれも海生付着生の種群で占められ、なかでも*Cocconeis scutellum*が極端に優占する群集組成であるとみなすことができる。*C.scutellum*は塩分12～35‰の海域に生息し、小杉（1986：文献名省略、以下同様）によれば、海藻及び海草付着生珪藻として知られる。そのため、当初製塩操業時の松崎遺跡の海岸付近には相当濃密な海藻（海草）が生えていたのではないかと考えた。だが、中粒～粗粒砂からなる松崎遺跡の海岸部に、このような古環境を想定することは困難であった。そのため、濃縮された海水が何らかの原因で海藻（海草）ときわめて関連の深いものであったのではないか、と考えるようになった。



製塩土器から検出された海藻付着生珪藻
Cocconeis scutellum（長さ50μm）

3．藻塩法

文献によれば、日本の古代製塩は「藻塩法」と呼ばれる方法で営まれてきたとされる。『来ぬ人を待つ帆の浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ』と歌に詠まれたように海藻を直接焼いたり、海藻を海岸付近の簀の上に並べ、それに海水を何度もかけて濃縮し製塩した、といわれる（白石：1973・近藤：1986・立松：1988）。しかし、いずれも確たる証拠は得られていなかった。今回の分析結果から、古代製塩に海藻が利用されていたことはほぼ確かなものになった。

さらに、杯部の残存する脚最上部からも珪藻遺骸を抽出し、量的には少ないもののほぼ同様の結果を得ることができた。一方、製塩土器を包含する砂層中には珪藻遺骸をほとんど含まず、出現珪藻の組成も大きく異なることから、今回検出された珪藻遺骸は土器包含層に由来するものではなく、濃縮された海水中に存在していたものであることは明らかである。

謝　辞

小文を草するにあたり、立松彰（東海市役所）・福岡晃彦・樋上昇の各氏に種々ご教示いただいた。記して感謝したい。

（森　勇一）

愛知県埋蔵文化財担当専門職員名簿 （平成元年６月１日現在）

県市町村名	所属	電話 職名	電話 氏名
愛知県	教育委員会文化財課	<052>	961−2111
		主任	赤羽一郎
		教育主事	遠藤才文
	埋蔵文化財調査センター	<0567>	67−4164
		所長	伊藤稔
		主査	加藤安信
	陶磁資料館	<0561>	84−7474
		学芸課長	柴垣勇夫
		主任学芸員	浅田員由
		学芸員	井上喜久男
		〃	仲野泰裕
		〃	野末浩之
名古屋市	教育委員会文化課	<052>	972−3268
		学芸員	小島一夫
		〃	山田鉱一
瀬戸市	教育委員会文化課	<0561>	21−1951
		係長	藤澤良祐
		主事	服部都
		〃	山下峰司
		嘱託	松澤和人
		〃	大蔵順子
小牧市	教育委員会社会教育課	<0568>	72−2101
		主任	中嶋隆
		主事補	坪井裕司
稲沢市	教育委員会社会教育課	<0587>	32−1111
		主事	北條献示
		文化財発掘調査員	日野幸治
東海市	教育委員会社会教育課	<052>	603−2211
		主査	立松彰
岡崎市	教育委員会市史編纂事務局	<0564>	23−6439
		嘱託	川崎みどり
		〃	伊藤久美子
安城市	教育委員会社会教育課	<0566>	76−1111
		学芸員	奥村勝信
		〃	天野信治
		〃	斉藤弘之
西尾市	教育委員会社会教育課	<0563>	56−7722
		主事	松井直樹
豊田市	教育委員会社会教育課	<0565>	31−1212
		副主幹	田端勉
		主査	伊藤達也
		主事	森泰通
豊川市	教育委員会社会教育課	<05338>	5−2111
		主事	前田清彦
新城市	教育委員会社会教育課	<05362>	3−1111
		書記	鈴木隆司
師勝町	教育委員会社会教育課	<0568>	23−6111
		主事	市橋芳則
吉良町	教育委員会社会教育課	<0563>	32−1111
		主事	荻野栄
一宮町	教育委員会	<053393>	3111
		主事	須川勝以
名古屋市	名古屋市見晴台考古資料館	<052>	823−3200
		学芸員	野口泰子
		〃	平出紀男
		〃	木村有作
		〃	野澤則幸
		〃	水野裕之
		〃	伊藤正人
		〃	服部哲也
		〃	竹内宇哲
		〃	伊藤厚史
		〃	千田嘉博
一宮市	一宮市博物館	<0586>	46−3215
		館長	岩野見司
		学芸員	土本典生
		〃	田中禎子
尾西市	尾西市歴史民俗資料館	<0586>	62−9711
		学芸員	伊藤和彦
半田市	半田市立博物館	<0569>	23−7173
		館長	立松宏
		学芸員	近藤英正
常滑市	常滑市民俗資料館	<05693>	4−5290
		学芸員	中野晴久
知多市	知多市民俗資料館	<0562>	23−1571
		館長	杉崎章
知立市	知立市歴史民俗資料館	<0566>	83−1133
		主事	岡本茂史
豊橋市	豊橋市美術博物館	<0532>	51−2621
		学芸員	贄元洋
		〃	小林久彦
		〃	岩瀬彰利
蒲郡市	蒲郡市博物館	<0533>	68−1881
		学芸員主査	小笠原久和
清洲町	清洲貝鶴貝塚資料館	<052>	409−1467
		技師	野口哲也
美和町	美和町歴史民俗資料館	<052>	442−8522
		主事	鎌倉崇志
武豊町	武豊町歴史民俗資料館	<0569>	73−4100
		館長	磯部幸男
		学芸員補	奥川弘成
三好町	三好町歴史民俗資料館	<05613>	4−5000
		館長	安田幸市
設楽町	設楽町立奥三河郷土館	<05366>	2−1440
		館長	鈴木冨美夫

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター　名簿一覧

役　員

理事長　松川誠次
常務理事　鈴木正明

理　事

小金　潔　県教育長
井関弘太郎　中部大学教授
伊藤秋男　南山大学教授
大参義一　信州大学教授
坪井清足　(財)大阪文化財センター理事長
楢崎彰一　名古屋学院大学教授
花木蔦雄　都市教育長協議会会長（一宮市教育長）
金島　覚　町村教育長協議会会長（西枇杷島町教育長）
下田修司　県土木部長
白井正巳　県教育委員会社会教育部長
武田　晋　清洲貝殻山貝塚資料館館長（清洲町長）
山田五夫　陶磁資料館館長

監　事

福地甲子八
小倉政則　県出納事務局次長

専門委員

考古学　楢崎彰一　名古屋学院大学教授
文献史学　早川庄八　名古屋大学教授
地理学　井関弘太郎　中部大学教授
建築史学　浅野　清　愛知工業大学教授
考古学 動・植物学　渡辺　誠　名古屋大学教授
形質人類学　池田次郎　岡山理科大学教授
保存科学　江本義理　前東京国立文化財研究所保存科学部長
岩石学　諏訪兼位　名古屋大学教授
木材組織学　木方洋二　名古屋大学教授

職　員

事務局長（兼管理課長）　渡辺守夫

管理課

主査　古田伴弘
主事　鈴木孝治　大野智靖
　　村上寿章　小倉晴美

調査課

課長　明壁正毅
課長補佐兼主査　森　勇一
　　山仲廣司
主査　梅本博志　福岡晃彦
　　神谷友和　日比　宰
主事　小澤一弘　松原隆治
　　山田　基　安井俊則
　　赤塚次郎　小塚俊夫
　　真鍋雅治　石黒立人
　　宮腰健司　佐藤公保
　　城ケ谷和広　北村和宏
　　酒井俊彦　池本正明
　　服部信博　川井啓介
　　後藤浩一　鈴木正貴
　　樋上　昇
嘱託　松田　訓　岡本直久
　　加藤とよ江　山口昌直
　　金子健一　伊藤隆彦

（平成元年6月1日現在）

センター日誌

役員の異動

理事長辞任　3月31日　中根昭二
理事辞任　〃　林　正治
監事辞任　〃　鈴木　毅

職員の異動

田上堅三　県教育委員会スポーツ課へ
土屋利男　碧南市立東中学校へ
平田睦美　愛知県立松蔭高等学校へ
水谷朋和　甚目寺町立甚目寺小学校へ
飴谷　一　愛知県立南陽高等学校へ
野口哲也　清洲貝殻山貝塚資料館へ

埋蔵文化財愛知 No.17
発行　平成元年7月
編集　(財)愛知県埋蔵文化財センター
〒498　愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802番24
TEL　0567−67−4161
印刷　株式会社 クイックス